

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

A Study on Educational Method : Mainly Depending on Steiner Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 重孝, IMAI, Shigetaka メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1209

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



教育方法に関する一考察

——シュタイナー教育を中心として

今 井 重 孝

はじめに

最初に、教育方法をめぐる三つの有力な考え方を比較して、シュタイナー教育の教育方法の優位性について述べる。その後、シュタイナー教育における教育芸術と呼ばれる教育方法が、7年周期による発達段階論に基づき、段階ごとに教育の方法を変えていく必要性から生み出されていることを指摘し、年齢段階ごとのシュタイナー教育における具体的な教育方法原則を提示して、現在のアクティブラーニング重視の流れの中で、具体的にどのようなアクティブな教育方法をそれぞれが新しく生み出していけるかという現在の課題に、示唆を与えることを目的としている。

1. 教育方法をめぐる三つの考え方

教育方法のあり方をめぐっては、次の三つの考え方がある。

- (1) 教育方法の目標は、誰にでも上手な授業ができるような、万能の教育方法を見出すことであるという、ベスタロッツや、向山洋一の考え方。

この考え方は、実現不可能なことが知られてきている。一人ひとりの子どもの違いにより、教育方法はその都度、生徒の状況に合わせて柔軟に変更する必要があるからである。

- (2) この点を鋭く突いたのが、「教育技術は不可能である」という教育学者が驚くような、ラディカルな「教育技術不可能論」である。この論は、ドイツの著名な社会学者ニクラス・ルーマンによって提起されたものである⁽¹⁾。

この社会学者の主張に対しては、ドイツの教育学者が批判を加えて論争を呼んだのであるが、ルーマンの主張は、現在の教育方法の考え方の弱点を的確に指摘していると筆者は判断している。

- (3) 二つ目の考え方を乗り越える教育方法についての考え方として有力なのが、「教育は芸術である」という考え方である⁽²⁾。この考え方を提起した人物として、ルドルフ・シュタ

イナーと斎藤喜博がいる。

以下まずは簡単に、「万能の教育方法」の限界を指摘した、「教育技術の不可能性論」とその限界を100年ほど前に既に取り越えていたシュタイナー教育の「教育芸術」という考え方を紹介したい。

2. 教育技術の不可能性⁽³⁾の主張について

ルーマンによれば、人間というものは、機械のように入力によって出力が決定できるような存在ではなく、入力に対して個別な処理を自律的に行い、それによって出力は多様な形になるために、入力によって出力をコントロールすることはできないとされる。確かに、身近な授業経験からしても、同じ授業を聞いていても人によって受け止め方が異なるというのは、日常的に体験できることである。

技術というものは、基本的に、インプットによりアウトプットをコントロールできることが前提で成り立つものなので、人間に働きかける教育の営みの場合は、反応が異なりうるために、誰に対しても、どこでも通用するような教育技術は存在しないというのである。

ところが、通常の授業は、教師が教えれば、生徒はその内容を機械的に理解し受け入れるということを前提として行われている。この誤った前提が共通理解となってしまうのは、この前提が崩れると、教育という営みを否定されることになりかねないからである、とルーマンは説明したのである。

筆者は、この指摘は、とても重要で、教育学の自明の前提を疑うという試みとして、高く評価できているし、さらには今の教育学のあり方をより現実的で役立つものへと転換する大きな機会となるとも考えている。

3. ルドルフ・シュタイナーの「教育芸術」についての考え方

現在の学問は、基本的に物理学をモデルとした物質科学の手法によって構築されている。つまり、生命の法則や人間世界の法則ではなく物質界の法則に依拠して構築されており、それゆえにこそあらゆる物質に共通の法則が探求されていて、客観性、実証性が学問の条件となっている。

しかしながら、教育は、人間機械を対象に行われるのではなく、一人ひとりの自己準拠的な存在に対して行われているのであり、一人ひとりの主観的な判断や興味に従って一人ひとりの反応は様々となるのである。こうした生命存在に関わる法則は、物の法則とは異なるのが当然なのに、無理に物の法則を当てはめようとしているのである。これは言いかえれば、人間をものと

してあるいは機械の部品として扱い、みなが自分の判断を組み込まずいわれたことを機械のように忠実に実行する人間機械として扱っていることに他ならない。

さて、こうした機械論的な人間観、唯物的な人間観、モノ的な人間観に対して、これでは本来の教育ができない、人類の未来が危ないという危機意識を抱き、本当の心身共に健全な人間形成に役立つ教育をしようとして、シュタイナー学校を1919年に創設し、世界に新しい教育モデルを示したのが、ルドルフ・シュタイナーである。

シュタイナー学校は、現在世界で1000校を超え、イデオロギーの違いを超えて、資本主義国にも社会主義国にも普及し、現在も拡大基調にある。2019年に創立100周年を迎えるシュタイナー学校は、新しい教育モデルとして世界的に普及しつつあるのである。

このシュタイナーの教育方法論の中核に、「教育芸術」(Erziehungskunst)という概念がある。社会学者のルーマンが指摘していたように、人間は、因果関係に従う単純な機械ではなくて、自分で自由にアウトプットを変えられる存在であるので、技術的な教育方法はふさわしくない。では、どんな教育方法が可能になるのか。それは、同じ話をしても、学びは一人ひとりの生徒の個性によってインプットも選別されアウトプットも自由に変容するという前提にあわせた教え方が必要であるということになる。100年前の教育方法が、一斉教授を原則としていたのとは異なり、現代の教育は、個性の育成が共通の教育目標になりつつある。ところで、芸術の特徴は何であろうか。芸術は、基本的に独創性、唯一性に支えられているものである。同じものであればコピーであって芸術作品とはいえない。芸術作品とは人間一人ひとりと同様唯一性によって支えられているものである。人間もまた個性において唯一性を持つ存在である。「みんな違ってみんないい」という金子みすゞの詩の言葉が人々に愛されるのも、全く同じ人間はこの世には存在しない、すべての人はそれぞれその唯一性によって尊い存在なのだという健全な人間観を表現しているからといえよう。

ここで、そもそも教育の究極的目的とは何なのかということが改めて問題となってくる。本来方法とは、目的があって、そこに到達するための方法として考案されるものであるからだ。人間一人一人、生徒一人一人に唯一性があるとすれば、すべての生徒を同じ状態にする事が目標とはなりえない。暗記に頼る画一的教育では、金太郎あめのような個性のない画一的な人間ができあがってしまう。オートメーション機械により生産される商品のように、同じものが次々と出来上がるとすれば、それは人間ではなくものと変わらないということになるだろう。

そう考えると、すべての生徒を同じ目的に向けて教育するというのは、人間教育としてはあるまじきことということになる。では、どんな目標を立てればよいのか。そもそも人間の人生の目的とは何なのか。それは人によって異なるであろう。なぜなら、自分以外の人と同じ人生を歩むことは不可能であるからだ。ということは、それぞれの生徒の目的は、それぞれ異なる。つま

り、すべての生徒は、自分にふさわしい人生目標をそれぞれが持って自分の人生を歩んでいくことになる。では、教育は何をすればよいのか。それははっきりしている。それぞれの生徒が、自分が納得できる人生を歩み切ることができるように援助することであるということに行きつくであろう。この教育が成功したら、すべての生徒が、自分が納得できる人生を歩むことができたという状態であり、これこそ、一人ひとりが自分にとって理想的かつ個性的な満足できる唯一的な人生を歩み通したということであり、一人ひとりがいわば美しい芸術作品であり人生自体がその生徒の芸術作品となるということなのだ。

シュタイナーの言う教育芸術は、教育の目的を、機械的な画一主義から、自分の人生をそれぞれが自分で創造していくこと、自分の人生を芸術作品を作るように、自分にとって美しく意味のある満足できるものとして作り上げることができるように手助けすることへと 180 度転換したのである。

多様性が強調され、個性や創造性が世界的に重視されてきている現在、まさに、100 年前にシュタイナー教育で提起された教育目的が今世界的に承認されつつあると見ることができる。教育方法のあり方も、そこで大きく変える必要があるのであるが、その転換として現在の日本で提起されているのが、アクティブラーニングの手法である。

実はアクティブラーニングは既にシュタイナー学校が、創設以来長年実施してきたものである。とすれば、現在の日本に必要とされているのは、「教育芸術」という人間形成にふさわしい教育方法について 100 年近い経験を既に積み重ねてきているシュタイナー教育の手法に学びながら、アクティブラーニングの手法を洗練していくことであるということになるだろう。

4. シュタイナー的な教育方法の基本原則

さて、一人ひとりの唯一的な人生に働きかけることができる教育方法上の原則にはどんなものがあるであろうか。

- 1) 一人ひとりの子どもの人生を援助するに一番必要なことは、一人ひとりの教師が、それぞれの子どもの個性をどこまでしっかりと読み取れるかどうかにかかってくるので、一人ひとり人の子どもの興味、好き嫌い、得意不得意、性格、などを、表情や振る舞い言葉などから読み取る力を養うことが重要となる。親や教師や学校や地域や国や企業や社会が子供に押し付けるのではなく、子どもの内側から立ち上がってくる意志・感情・思考を尊重することが大事なのである。具体的に何をしたらよいかは、その読み取りとの関係で決まってくるものだから。
- 2) 地球上に自分と全く同じ人間は存在しないし、全く同じ人生を歩む人もいないという原

則は、子どもだけでなくもちろん教師の側にも、親の側にも当てはまる。クラスごとの違い、学校の違い、地域の違い、その上に、教師の個性の違い、親の個性の違いが加わる。ということは、一人ひとりの教師は、自分の生徒に対する自分なりの教育方法を洗練させていくということつまり自分なりの教育方法を工夫し続ける努力が一番大切であるということになる。

- 3) さて、子どもの潜在化している力を読み取って成長させるように援助する場合、重要な子どもの成長法則がある。この法則を知らないと、子どもに対する働きかけ方を誤ることになる。なぜなら、発達段階により子どもの学びのあり方が大きく変容するからである。この点において最先端の現代教育学における発達段階論と、シュタイナー系の発達段階論の違いについて知ることは、年齢にふさわしい自分なりの教育方法を生み出す場合に極めて重要な前提条件である。

発達段階論の大きな違いは重要なのでまた後で触れることにする。

- 4) 人間の個性は、個人個人によって唯一的であるが、気質については、古代から四気質の存在が知られているが、この憂鬱質、胆汁質、多血質、粘液質という四つの気質の違いは、人類に共通のものなので、しっかり把握できるようにすることが望ましいと、シュタイナー教育では考えられており、気質により算数の教え方を変えたりして、気質にふさわしい教え方を工夫している。これは、絵を見たり、歩き方を見たり、体型を見たり、振る舞いを見たり、表情を見たりして読み取ることができるので、体験的に洗練させていくことができる。自分の判断が正しいかどうかは、つねに現実の目の前の子どもたちの反応によって確認してより精密な判断ができるように自己訓練していくことが肝要である。

5. 発達段階の法則について

現代教育学の発達段階論は、ジャン・ピアジェ学派の発達段階論が世界共通の見方となっている。この発達段階論の特徴は、知能の発達段階に基づいて構築されているということである。よく知られているように、ピアジェの発達段階論は次のようになっている。

1. 感覚運動的知能の段階 0歳～2歳
2. 前操作的知能の段階 2歳～7歳
3. 具体的操作的知能の段階 7歳～11歳
4. 形式的操作的知能の段階 11歳～14歳

ここで、操作といわれているのは、論理的操作のことを意味している。この段階論の特徴は、知能は、既に、0歳から備わっており、言葉が話せないので確認はしにくいだが動作を観察すれば

知的な思考に基づいて行動していることが推察できるという具合に、知能は、生まれたときから働いていて、それが次第にレベルが高くなっていくだけと考えられていて、いわば、知能は直線的に発達していくと考えられているところに特徴がある。この発達段階論では、知的な早期教育を否定する考え方は出てきにくいことがわかる。

ピアジェの発達段階論と異なり、シュタイナーの発達段階論では、

1. 0歳～7歳 意志の教育の時期
2. 7歳～14歳 感情の教育の時期
3. 14歳～21歳 思考の教育の時期

とされている。この発達段階の特徴は、知能に働きかける教育は、14歳以降の段階に行われるのがよいと考えられている。また、7歳から14歳の間は、感情に働きかける教育を中心とするのが良いと考えられていて、生徒自身に論理的に思考で働きかけるのはまだまだ早いとされている。従って、子どもの成長力は、知能が複雑化していくという直線型ではなく、意志の成長力が感情（心）の成長力へと変容し、さらに7年後に、思考力の成長力へと変容していくという変容型の発達段階論となっているところである。言いかえると、ピアジェは知能の発達しか見ていないのに対して、シュタイナーは、意志の発達と感情の発達、思考の発達の三つを考慮してホリスティックな変容型の発達段階論を提示している。ピアジェの理論が知育偏重型になりやすいのに対して、シュタイナーの変容型発達段階論は、意志と感情と思考のバランスの取れた発達段階論となっているわけである。

この違いが、年齢段階別の教育方法の違いを生み出すということが、重要である。ピアジェ方式は、基本知育中心に展開される。それに対し、シュタイナー教育は、意志の教育、感情の教育、このあとに思考の教育が来るので、知育中心の教育は、14歳以降ということになる。

100年近く実践されてきているシュタイナー学校の卒業生調査の結果⁽⁴⁾を見ると、学力も高く、他者への共感に富みコミュニケーション力のある大人へと成長していることがわかる。まさしく生きる力を持つ成人へと成長しているのである。この結果を見ると、シュタイナー教育の発達段階論に基づいて教育を行う方が、よりバランスの取れ、自分の感覚を大切に、豊かな感情を持ち、自分で考え、自分で判断し、自分の人生を切り開いていく力を持った成人へと成長しているように見える。

この比較から言えることは、知育中心に組み立てられているアクティブラーニングを変容型発達段階に沿ったアクティブラーニングへと洗練していくことが重要な課題であるということである。

6. 0歳から7歳までの教育方法論の基本原則について

近年の脳研究の成果として、脳科学者の黒川伊保子は、脳は7年ごとに成長を遂げるとの論を展開している⁽⁵⁾。しばらく前に、教育学者の安彦忠彦は、脳科学者との共同研究を行い、脳の発達段階として、9歳頃が重要な時期であるとの指摘をしていた⁽⁶⁾が、こうしたシュタイナー系の発達段階論を脳科学が根拠づけてくれる知見を提供してくれているということは、7年周期の発達段階論の科学的妥当性を担保してくれていると見る事が出来る。

そこで、シュタイナーの発達段階論に即した教育方法上の、第一7年期（0-7歳）の基本原則を取り挙げることにする。

0歳から7歳の特徴は、意志の教育の段階と特徴づけられていた。意志は基本的にその子の動き振る舞い行動に現れる。人間は誰でも通常手足は自分の意志に従って動かす。これは日常的に誰もが体験していることである。病気としては、自分の足を自分の足と感ずることができない症状を示すことがあることが知られているが、それは例外である。

とすると意志の働きは体を思いどおりに動かすことと密接な関係があるということである。幼児は、目覚めている間は、ひっきりなしに自分のからだを自分の意志に従って動かそうとしている。

幼児は、体を動かすことが仕事なのである。幼稚園という名称の名付け親でもあるフレーベルは、よく知られているように幼稚園は遊びが中心で学校では学びが中心であると主張していた。遊びは、子どもたちが自主的につまりは自分たちの意志に従って行う活動である。それが、幼稚園で一番大事な活動だというのである。シュタイナー系では、0歳から7歳までの子どもの学びは、体の活動とりわけ身の周りにいる大人の模倣活動を通してなされるのであり、言葉で働きかけたり、映像を見せたりしても、学びにはならないと考えられている。ピアジェ学派であれば、知能に働きかけるのが教育の基本なので、言葉によりあるいは映像により学ばせることも有力な教育方法であると考えることになりやすい。この考え方の違いから、シュタイナー系では、第一7年期において以下のような教育方法が推奨されている。

1) 模倣の原則

まわりの大人が、模倣されて良いような、模範的な振る舞いを意識的に心がけることが、幼児の学びにとって重要である。幼児を道徳的な大人に育成したいと考えるならば、まわりの大人たち、保育士の先生方自身が毎日子供の前で不道徳な振る舞いや言葉遣いをしないことが重要ということになる。そのためには、保育士たちも自分の作業や仕事をしたりして、それを見て、興味を持った子供が活動するような環境にする事も有効である。

2) 自由遊びの原則

子どもの自主性、意志を尊重することが大切なので、できるだけ、自由意志に基づいて好きな遊びができるような環境を整備することが重要となる。すべての子どもに同じ活動を強制するよりも、自由に好きな活動ができるようにした方がよいのである。

3) 個性重視の原則

一人一人の子どもの気質、個性、興味、話し方、語彙、性格、家庭環境、などに常に留意して、個別に対応する仕方について工夫を重ねることが重要である。ペースの違いなど、子どもの個性の違いは大きいので、画一的な指導は原則避けるのが望ましい。

4) 体験重視の原則

この年齢の子どもは、基本的にやってみて体験して学ぶものなので、豊かな体験を与えられる環境を整備することが重要である。色彩体験を豊かにするために濡らし絵を体験させたり、自然体験を豊かにするために、緑の多い園庭で遊んだりあるいは近所の公園に出かけて行って自然に親しむ経験をさせたり、動物を飼ったり、植物を育てる経験をさせたり、専門職人などを呼んで実際の物づくりを見る体験をさせたり、音体験を豊かにするために、美しい音色の楽器に触れたり、わらべ歌を歌ったりする。先生が唱ってあげているうちに子どもたちが真似してうたうようになることがベスト。強制は基本避けるのが望ましい。色彩体験も重要なので、カーテンの色なども年齢にふさわしい色合いにする。

5) 誕生日会など

シュタイナー系では、個人を大切にするので、誕生日会は、一人ひとり時間をかけて行う。

園では、必ず、先生が入り口に立って一人ひとり挨拶してお迎えする。季節の祝祭は一年のリズムとして大切なので、大事にお祝いする。父兄に見せるためではなく、子どもの祝祭体験のために祝祭をする。

6) お話

絵本の読み聞かせは、日本の園で普通に行われているが、理想を言えば、先生や保育士が自分のイメージに従って、何も見ないでおはなしをするのが一番よいと考えられている。なぜならファンタジーの力は、特定の絵を見るとその絵に引っ張られて自分の独自のイメージを作り出す力が弱まると考えられているからである。絵も精密なものよりは、ぼんやりした絵のほうがよいと考えられている。

7) 異年齢集団

シュタイナー系では、異年齢の子どもたちがともに同じ空間で出会うことによる体験の重要性が考慮されているので、異年齢集団を作ることが重視されている。

7. 避けた方がよいと考えられている教育方法

1) 画像による教育

テクノロジーの発展により、映像を通した伝達方法が、幼児教育においても採用される可能性が高くなってきている。しかし、第一7年期的子どもには、映像を見せない方がよい、とシュタイナー教育では考えられている。なぜか。この年齢の子どもたちは、模倣によって学ぶことによってしか、つまり身体活動を通して学ぶことによってしか、言いかえると直接体験を通して学ぶことによってしか、学ぶことができないからである。この年齢の子どもはまだ間接体験によって学ぶことは不可能なのである。不可能でないように思える人も少なくないであろうが。

この年齢層の子どもの模倣力は、大人の模倣力とはけた違いに強力なのである。その証拠は、地上の言葉をまだ学んだ経験のない赤ちゃんが、3年もたてば、母語を理解し話せるようになるところに示されている。大人には、新しい外国語を学ぶのは通常非常に困難である。この模倣力は、実に精密で、細かな表情の動きだけでなく、分泌物にいたるまで細かに観察できるのであるという。実は、大人の脳ですら、「相手の表情筋をくまなく感知する」⁽⁷⁾ 力があるというから、幼児の模倣力は想像を絶するほどなのである。しかし、これは生身の人間が対象である場合に限るのだ。子どもは、じっと見つめて口の動きを観察する。時間をかけてまた角度を変えて観察する。自分の関心に従って観察する。観察したくて観察する。精確な観察と、状況の直観力が合わさって言葉の模倣と理解が進むのである。

しかし、テレビ画面は、カメラの動きにより観察対象が動き、子どもの意志で観察時間、観察場所を選択することができない。そのために精確な模倣が不可能なのである。

さらに、画像を見ている間は、目の筋肉は動くが、通常自分の意志で移動することはできず、意志を実現する活動をすることができない。体操番組を見て動くことがあるが、この場合も、じっくりと観察することができないので、その動きがいかなる意志でなされいかなる感情により支えられ、いかなる思考によって行われているかを模倣により感じ取ることはできないのである。つまり不完全な模倣になるのである。幼児の模倣は、模倣を通じて、その動作をしていた大人の意志・感情・思考を内側から感じ取ることができるほど正確なものなのである。

テレビを見ると言葉の学びが遅れるので注意するようにとの緊急提言が日本小児科学会から2004年4月8日出されたのも不完全な模倣では言葉は学べないことを示しているといえる。

2) 早期教育

幼児の頃から、文字を教えたり、計算を教えたり、知的早期教育を行う傾向も少なからず見受

けられる。しかし、知的教育は、体を通して学ぶのではなく頭を通して学ぶので、脳がまだしっかり完成していないうちに、脳を使うと、かえって脳の形成力が弱められて、せっかく持って生まれた思考力が発揮できなくなるということが起こる。たしかにまだ十分完成しないうちに負荷をかけすぎると、消耗してしまって完成しなくなるというのは、生き物の成長の法則として理解可能である。幼児の体で大人の体への負荷をかけたら、体が破壊されてしまう。幼い脳も負荷をかけすぎると成長を阻害されうるということは、おおいにありうるだろう。

英語を幼児教育で教えるというのはどうであろうか。今結構流行ってきている印象があるが。これについては、母語が確立してから外国語を学んだ方が良く、模倣力は、9歳ころまで残存するので、小学校1年生から二つの外国語を、母語を交えず学び始めることで十分と考えられ、1919年のシュタイナー学校創設以来、この理念が維持されている。このシュタイナー学校の影響によりヨーロッパでは、小学校1年生から外国語を学ぶことが標準化してきているのである。

8. 変容型発達段階論による7歳から14歳までの教育の特徴について

7歳から14歳までの教育は、感情の教育の時期と呼ばれている。この変化は、子どもの呼吸器系と循環器系が大人のリズムになる（1分間の呼吸数18回に対して1分間の脈拍数72回つまり1対4の比率）のはこの第二7年期においてなのである。脈拍や呼吸が、感情の影響で変化することは、私たちが日常的に経験できることであり、心臓は心のある場所と日常的に考えられていることとも対応している。感情とはそもそも何か、という問いもあるが、シュタイナー系では、共感と反感の間での振動が感情なのだと考えられている。感情はまた、弱められた意志であるとも言われている⁽⁸⁾。

ところが、現在の世界の教育は、ピアジェの発達段階論の影響が強いために、7歳から14歳までの教育は、基本、知育中心に組み立てられている。暗記中心にならないように、問題解決学習や、総合的学習や、プロジェクト学習や、ディベートが取り入れられてきており、受動的な暗記学習から、能動的な学習へ、考える学習へと移行してきているが、シュタイナー系の発達段階論によれば、思考に訴えるのはまだ早く、教師に対する畏敬の念という感情に支えられた学びが効果的である。

理屈で理解するためには、思考力を使用する必要がある。思考力に負荷がかかることになる。教師に対する畏敬の念があれば、教師の語るとは、この先生が語っているのだから正しいに違いないと確信して、そのまま正しいものとして受け入れられていく。0歳から7歳までの子どもが、体を動かすことによって学んだのに対して、この年齢段階の子どもには、語りによって、言葉を通して学ぶことが可能になるわけである。感情の育成には、美しいものに接触することが効

果的であるので、とりわけ、7歳から14歳までの子どもに対しては、芸術的要素を授業の中に入れることが有効である。そのために、シュタイナー学校では、国語、算数、理科、社会系の主要科目は、エポック授業という形態（3ないし4週間続けて、午前中2時間分同じ科目を継続して行う授業）を取り、2時間という長い時間を小学生が集中を維持できるのかという疑問が生じるであろうが、国語の時間でも、途中で、絵を書いたり、詩を読んだりと芸術的な要素を取り入れて授業するので、子どもたちは飽きないのである。

この年齢段階において、芸術に接することが本当に、感情に影響があるかどうかを調査したことがあるが、コンサートや美術館に行ったことのある生徒の方が、道徳的感情が、優位に強いという結果が出た⁽⁹⁾。

シュタイナー学校の卒業生は、前にも述べたように、リーダーシップがあり、生きる自信を持っており、他者への共感力にすぐれ、コミュニケーション力があるといった傾向を示している⁽¹⁰⁾ ことから、思考・感情・意志のバランスの取れた大人が育っていることがわかる。この年齢段階で、尊敬する大人の言葉に傾聴する体験を持った子どもは、14歳以降の思考の教育の段階において、相手の話に耳を傾け理解したうえで自分の考えを述べるようになるのである。

日本では、ディベートが小学生から導入されたりしているが、自分でしっかり他者の意見も吟味しつつ自分の意見を言う力は、まず人の話に耳を傾ける経験を経てから思考の教育をしてはじめて身につくものである⁽¹¹⁾。

日本の大人たちがテレビ討論で、相手の意見を受け入れたうえで自分の意見を展開するのではなく、自分の意見をそれぞれが主張しあうだけに終わってしまうのは、シュタイナー的に考えれば、第二7年期の教育が、早くから考えさせていることの影響であるということになるだろう。

従って、第二7年期における教育方法の原則は、思考に訴えかけたり、ディベートをさせたり、問題解決学習をさせたりするのではなく、子どもの美的感性に対して働きかけられるように芸術的要素をあらゆる授業に組み込む努力をするということになる。もちろん、作業とか、音楽や絵画や彫刻や栽培など体験型の学びも有効である。ただ頭にだけ働きかけるのではなく、シュタイナー学校で行われているように、掛け算の九九を覚えるときも、丸い板の上に10本の釘を打ち、その釘に0から9の数字を割り振って、掛け算の末尾の数字のところに糸かけをしていくと、2の段、3の段、4の段というふうに段によってもようが変わる。それが美しいので、そうした手や目を使い掛け算の勉強をするのである。

考えさせるだけではない、どう感じたかという問い、感じたことを絵などで表現するなどの試みを入れることが大切なのである。頭中心にならない工夫をすることが、この年齢の教育方法で一番注意すべきことなのである。

14歳から21歳の段階⁽¹²⁾ になるとディベートの授業が可能となる。アクティブラーニング、

問題解決学習、プロジェクト学習が可能になるのである。ただ、この年齢段階は思考の教育だけをやればよいということではなく、考えさせる教育が可能になる段階なのであり、体験学習や芸術表現学習などを適宜混ぜることは、推奨されるべきである。思考の教育しかやってはいけないということではないのである。

おわりに

ここでは、変容型発達段階論の立場からすれば、年齢段階別に教育方法を変える必要があること、またどのように変えていったらよいかについて論じた。もちろん、具体的にどう教えるかという次元では、それぞれの子どもの個性と、教師の個性、学校の風土、地域の環境などに合わせて、独自の教育方法を作り上げていくことが肝要なのであるが、その時、年齢段階別の基本原則を踏まえながら工夫していくことが大切なのである。

最終的な基準は、実際に目の前の生徒の反応が一番大事であり、それに基づいてフィードバックをかけながら自分の教育方法を洗練させていくことが大切なのである。実際に、ほぼ100年の歴史があり今なお増加しつつあり、大きな成果を上げているシュタイナー教育のホリスティックな発達段階論に学ぶことが、今の時代とりわけ求められている。自分の意志・感情・思考に依拠して物事を決断する力や生きる力を育成することに成功すれば、民主主義も健全に機能し、社会はサステナブルでバランスの取れた社会となり、フランス革命の掲げた、自由・平等・友愛が真に実現することになるであろう⁽¹³⁾。

《注》

- (1) 石戸教嗣・今井重孝（編著）『システムから教育を探る…自己創出する人間と社会』（勁草書房、2011年）
- (2) ルドルフ・シュタイナー著、高橋巖訳『ルドルフ・シュタイナー教育講座〈2〉/教育芸術〈1〉方法論と教授法』（筑摩書房、1989年）、ルドルフ・シュタイナー著、高橋巖訳『ルドルフ・シュタイナー教育講座〈3〉/教育芸術〈2〉』（筑摩書房、1989年）、斎藤喜博著『教育学のすすめ』（筑摩書房、1979年）
- (3) Niklas Luhmann und Karl Eberhard Schorr, "Das gtechnologiedefizit der Erziehung und Pädagogik" Z.f Päd 25 (1979) S. 345-365.
- (4) 今井重孝「三つのシュタイナー学校卒業生調査の主要結果について」『青山学院大学教育人間科学部紀要』53-68頁、2010年
- (5) 黒川伊保子著『成熟脳』（新潮文庫、2018年）
- (6) 安彦忠彦著『カリキュラム開発のために子どもの発達と脳科学』（勁草書房、2012年）シュタイナー教育では、9歳は第二の自我の目覚めの時期とされていて、発達段階の重要な節目と見られている。
- (7) 黒川伊保子、前掲書、82頁
- (8) ルドルフ・シュタイナー著、高橋巖訳『教育の基礎としての一般人間学』（筑摩書房、1989年）

- (9) 今井重孝「シュタイナーの道德教育論」青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『モラル教育の再構築を目指して——モラルの危機とキリスト教』（教文館所収, 2008 年）
- (10) 今井重孝「三つのシュタイナー学校卒業生調査の主要結果について」『青山学院大学教育人間科学部紀要』56 頁, 2010 年
- (11) 今井重孝「ディベートに適した年齢, 適さない年齢」石井 薫編, 『地球マネジメント学会通信』（地球マネジメント学会 2004 年）所収
- (12) シュタイナー著, 高橋巖訳『ルドルフ・シュタイナー教育講座〈別巻〉/十四歳からのシュタイナー教育』（筑摩書房, 1997 年）
- (13) ルドルフ・シュタイナー著, 今井重孝訳『社会問題としての教育問題——自由と平等の矛盾を友愛で解く社会・教育論』（イザラ書房, 2017 年）

（提出日 2018 年 9 月 27 日）